

液卵のイフジ産業、鳥インフルで急騰 キューピーと明暗

2025/03/18 05:00 日経ヴェリタス 1185文字

業務用液卵大手のイフジ産業（2924）株が17日急騰し、前営業日比一時17%高の2044円まで上げて上場来高値を更新した。買いのきっかけは前営業日に2025年3月期の業績と配当の予想を上方修正したことだ。鳥インフルエンザが猛威を振るい、鶏卵の価格が高騰するなかで安定供給力が光り、中長期マネーも関心を寄せている。

イフジ産業は東証スタンダード上場で福岡県に本社を置く。主力事業は鶏卵の中身を取り出して液状化した液卵の製造・販売だ。卵黄と卵白を分離したものなど食品メーカーや飲食店の作業効率向上につながる製品を手がけ、外食や中食需要の拡大を捉えて業績を伸ばしてきた。

25年3月期の連結純利益予想は前期比36%増の21億円と、従来予想（同8%増の17億円）から大幅に上方修正した。あわせて年間配当予想を前期比5円増の53円から、同18円増の66円へと引き上げた。販売数量が過去最高ペースで推移していることを踏まえた。

鳥インフルが1月以降に全国で急激に広がり、鶏卵の需給が引き締まっていることで液卵への代替需要も出てきているという。

足元では「差益」を狙う戦略が奏功している。JA全農たまご（東京・新宿）によると、Mサイズの鶏卵の卸値は17日までの3月平均で1キロあたり325円（東京地区）と前年同月比5割も高い。藤井宗徳社長は日本経済新聞の取材に「価格相場が低い夏に仕入れを増やして冷凍し、差益が生まれる冬に売るよう戦略的に取り組んでいる」と話す。

イフジ産業は液卵の国内市場で1割強のシェアを持ち、キューピー（2809）に次ぐ2位とみられる。事業構造が異なり単純比較はできないが、キューピー株には「鳥インフルによる殺処分羽数は会社想定を上回り、コスト増によって利益成長はいったん踊り場になる」（外資系証券会社）との見方があり、24年末比で1割安に沈む。

対照的な値動きの背景には、安定供給力への期待もある。鳥インフルが猛威を振るい店頭で購入制限がかかるまでの事態となった23年の「エッグショック」時。イフジ産業は「業界で一番早くブラジル産鶏卵の輸入を決断した」（IR担当）という。

肥後銀行傘下の投資助言会社、九州みらいインベストメンツのチーフファンドマネージャーでイフジ産業とも複数回対話した日高真一郎氏は「独立系ならではのフットワークの良さを感じた」と話す。液卵業界では中小・零細が多く「業者の再編が進むなかでシェアを高めていける可能性がある」とみる。

株価急騰を踏まえても予想PER（株価収益率）は7倍台と割高感は乏しい。西日本シティTT証券の松本義一郎チーフアナリストは「地方銘柄は普段の注目度が低い分、上場来高値を抜くなどきっかけがあると買いが続きやすくなる」とみていた。

（今堀祥和）

許諾番号30102917 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報（以下「情報」）の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.